

ブリュッセル人作家のオートフィクションに見る ベルギー・アイデンティティ

——ピエール・メルテンス『王の平和』と
ジャン・ムノ『ブラバントの英雄の忌むべき物語』をめぐって

山内 瑛生

はじめに

「自伝 autobiographie」は、現代のフランス文学において、1970年代以降特に注目を浴びるようになった文学ジャンルの一つである。一般に作者の人生を偽りなく描いたものと考えられている「自伝」に対し、昨今では創造・フィクションという側面をより重視した自伝的な作品のことを「オートフィクション autofiction」という言葉で表すようになってきている。この言葉は、1977年に、セルジュ・ドゥーブロフスキーが自らの小説『糸／息子 *Fils*』に対して用いたものだが、その後広く使用されるようになり、フランスを中心に自伝やオートフィクションが盛んに書かれ、それを対象とした研究も進展している。

同様の傾向は、ベルギーのフランス語文学にも見ることができる。エスパース・ノール叢書のベルギー・フランス語文学教育のための資料としてウェブ上で公開されているスタニスラス・ペイの『オートフィクション——教育用資料』では、ベルギー出身の作家八名の自伝的作品が取り上げられ、ベルギーにおけるオートフィクションのあり方に関する考察がなされている。本稿では、この資料でも取り上げられているブリュッセル出身の二人の作家の作品、ピエール・メルテンス(1939-)『王の平和 *Une paix royale*』とジャン・ムノ(1924-1988)『ブラバントの英雄の忌むべき物語 *Histoire exécrable d'un héros brabançon*』をオートフィクションとして捉え直したうえで、特に小説内における語りの特性に注目しながら、両者が共通して描き出しているベルギー・アイデンティティの諸相について論じる。

第一章 自伝とオートフィクション——定義とベルギー・フランス語文学における歴史的背景

二つの小説の分析に先立ち、まず「自伝」と「オートフィクション」という二つの文学ジャンルの定義について言及する必要があるだろう。1970年代以降、フランスではア

ブリュッセル人作家のオートフィクションに見るベルギー・アイデンティティ
 —ピエール・メルテンス『王の平和』とジャン・ムノ『ブラバントの英雄の忌むべき物語』をめぐって

ニー・エルノーやパトリック・モディアノといった作家を中心に自伝的な作品が相次いで発表されており、文学の領域における一つの大きな潮流を形成している。

1975年、フィリップ・ルジュンヌは『自伝契約 *Le Pacte autobiographique*』の中で、自伝とは何かという根本的な問いを投げかけた。まず自伝の定義について彼は次のように述べる。

DÉFINITION : *Récit rétrospectif en prose qu'une personne réelle fait de sa propre existence, lorsqu'elle met l'accent sur sa vie individuelle, en particulier sur l'histoire de sa personnalité.*

定義：ある実在の人物が、自身の存在を落とし込んだ、散文形式の回顧的な物語。自身の個人的な人生、特にその人格に関する物語を強調しているときにそれは自伝となる。¹

例えば、回想録の場合、「作者の個性は個人的な視点に現れるが、叙述の対象は個人をはるかに越えるものであり、作者が帰属する社会的および歴史的集団の歴史²」となるのに対し、自伝の場合はあくまで作者個人の人格にかかわる歴史の再構成が主眼だとルジュンヌは考える。だが、彼は、自身の定義が多くの問題を孕んでいると認める。特に作品の内的構造の分析だけでは「自伝 *autobiographie*」と「自伝的小説 *roman autobiographique*」とは区別不可能だとルジュンヌは指摘し、この境界を明確化するために「自伝契約 *pacte autobiographique*」という概念を持ち出す。

Le pacte autobiographique, c'est l'affirmation dans le texte de cette identité, renvoyant en dernier ressort au nom de l'auteur sur la couverture.

自伝契約とは、テキストの中で、最終的に表紙にある著者の「名前」を指し示すこのアイデンティティの表明である。³

つまり、たとえ内容面で事実と異なる箇所があったとしても、著者と読者との間に作品が自伝であるという合意（これをルジュンヌは「契約 *pacte*」という言葉で表す）が成り立つことが重要であり、その際、アイデンティティを表明すること、すなわち著者の名前＝主人公の名前であると明言することが、自伝を自伝として成立させる条件だとルジュンヌは主張したのである。

ルジュンヌの「自伝契約」の概念提唱以降、自伝的作品に関する分析がフランスでは活発になる。先述のセルジュ・ドゥーブフロフスキーは自身の小説『糸／息子』に関して以下のように語っている。

Autobiographie ? Non, c'est un privilège réservé aux importants de ce monde, au soir de leur vie, et dans un beau style. Fiction d'événements et de faits strictement réels ; si l'on veut, autofiction, d'avoir confié le langage d'une aventure à l'aventure du langage [...].

自伝？ いや、これは、この世界の重要なものだけに与えられた特権だ、それらの生の黄昏に、美しい文体の中において。厳密に現実起こった出来事、事実であるようなフィクション、いわばオートフィクション [autofiction] だ。ある冒険についての言語を言語の冒険へと託した、そういうフィクションだ […]⁴

つまり、ドゥーブロフスキーは、言語・文体上の新たな試みとして、事実をもとにしたつも、フィクションという方法に重点を置いた作品をオートフィクションと呼び、自身の小説において実践したのである。彼は、オートフィクションを文体的な実践として捉えたが、その後この言葉は広がりを持つようになる。例えば、ジャック・ルカームやヴァンサン・コロナは、ドゥーブロフスキーの定義を他の小説作品にも適用させ、記憶と架空の出来事の混ぜ合わせや実際には経験しなかった出来事に作者自身を投影した作品などをオートフィクションに含め、このジャンルにより幅を持たせようとした⁵。ドゥーブロフスキーは、コロナらの定義について、「自伝的小説 roman autobiographique」とオートフィクションを混同しているとし、作者が陰に隠れている自伝的小説よりもオートフィクションの方が「参加型のジャンル genre engagé」だと捉え、作者自身がより前面に出たラディカルな形式だと主張した。しかしながら、オートフィクションの定義に関しては、統一的な見解がまだ存在せず、曖昧性を孕んだ概念にとどまっている。とはいえ、ルジュンヌの言うように、自伝が作者と主人公（伝統的な自伝の場合は語り手）の名前の一致を明確に表明したものであるとするならば、逆にオートフィクションは、こうした自伝の形式を意図的に崩し、たとえ主人公と作者の人生に共通した要素が表れているとしても、作者、語り手、主人公という三者のアイデンティティの関係性を不明瞭にしたジャンルだと考えることができるのではないか⁶。

フランスでこのように自伝やオートフィクションの理論化が発展した1970年代半ば以降、ベルギーのフランス語圏においても自伝的な作品が多く誕生した。「自己」に関わる探究が進展した背景には、ベルギー独自の事情も影響している。1960年代以降、ベルギーでは、北部のオランダ語圏と南部のフランス語圏との対立が激化した。言語間対立が国家の存続を揺るがす事態にまで発展した結果、連邦制を導入する動きが活発化し、数度の憲法改正を経て、1993年にベルギーは正式に連邦国家になった。この一連の流れの中にあつた1970年代は、文学の領域においてもベルギー人とは何かという根本的な議論が白熱化する。ピエール・メルテンスによる「ベルジチュード」は、こうした状況を受けてベルギー人のアイデンティティの所在を模索した一つの成果と言えるだろう。1976年、『レ・ヌーヴェル・リテレル』誌において、メルテンスと社会学者のクロード・ジャヴォーを中心に、「新たなベルギー « Une autre Belgique »」というタイトルの特集が生まれ、多くのベルギー人作家や知識人が寄稿した。ここで使用された「ベルジチュード」という言葉は、ベルギー人のアイデンティティの脆弱さを認めたくえで、なおも他者に依存しない「ベルギー人であろう tenter d'être Belges⁷」とする態度の表明を意味した。ジャヴォーは、

同様の考え方について、「プロジェクトとしてのベルジチュード belgitude-projet⁸」という表現を用いている。しかし、この概念は、その後賛同者を獲得すると同時に多くの作家や知識人からの批判の的となる。例えば小説家シャルル・ベルタンは、自身を「ベルギー国籍のフランス作家 *écrivain français de nationalité belge*⁹」だと主張し、「ベルジチュード」の支持者から距離を置いた。また、一部のワロニーの知識人は、メルテンスらの考え方を「あまりにブリュッセル的 *trop « bruxellois »*¹⁰」だとして批判した。1983年には、社会学者のジャック・デュボアや劇作家のジャン・ルーヴェなどが中心となり、「ワロン文化のためのマニフェスト *Manifeste pour la culture wallonne*」を出すに至る。

Face au « manifeste » de la belgitude qui exprimait autant sinon plus un malaise qu'un élan, les intellectuels wallons voulurent affirmer une identité positive et tranchée. Face au « tenter d'être belge », il y aura l'« oser être wallon ». Ce fut le *Manifeste pour la culture wallonne* en 1983 qui cherchait à assortir l'autonomie économique en marche d'une autonomie culturelle.

気分の高揚と同じかそれ以上に不調を表明するベルジチュードの「マニフェスト」に対し、ワロン地方の知識人は肯定的で明確なアイデンティティを示そうとした。「ベルギー人であろう」とすることに対して、「思い切ってワロン人であろう」とすることも可能はずだ。これが、進行中の経済的な自立に文化的な自立を付け加えようと模索した1983年の「ワロン文化のためのマニフェスト」となった。¹¹

二言語併用地帯であるブリュッセルと、一部地域を除きフランス語のみが公用語のワロニーでは、アイデンティティの不安定さへの捉え方も異なる。ベルギー人のアイデンティティの不確かさ、「不調」を条件として認める「ベルジチュード」の考え方に対し、ワロン人はこのように異議を唱えた。1988年にメルテンスが「ベルジチュードに別れを告げるために¹²」というタイトルの講演を行ったこともあり、この議論はその後下火になる。本稿で分析する1995年に出版された『王の平和』は、以上のような論争の後に書かれた小説であり、次章で詳述する本作品のベシミスティックな性格も、作家自身の「自己」、そしてベルギー人アイデンティティを探究することの困難を物語っているであろう。

一方、ジャン・ムノも『新たなベルギー』の特集以降、メルテンスらの動きに共感を示した。1980年、ジャック・ソシェールを中心に『それでもベルギー *La Belgique malgré tout*』という選集が編まれ、メルテンスとムノを含む多くのベルギー人作家や知識人が自国ベルギーに対する各々の思いを表明した。ムノは、この選集に『ブラバントの英雄の忌むべき物語』のプロローグにあたる部分を掲載している。実際、この小説には「ベルジチュード」という単語がそのまま登場しており、彼がこの概念に強い関心を持っていたことが窺える。『ブラバントの英雄の忌むべき物語』は、「ベルジチュード」についての議論が熱を帯びていた最中の1982年に発表された作品であり、後述するように作中に見られるベルギー・アイデンティティの描写も、この概念と親和性を持っていると言える。

このように、メルテンスとムノは同時代のベルギーの小説家の中でも「ベルジチュード」を支持する作家であり、だからこそ彼らのオートフィクションに見られる「自己」の問題を母国のアイデンティティと結び付けようとする態度は、他のベルギーのフランス語作家の自伝的作品に比べて明確になっていると言えるだろう¹³。次章以降では、本章で検討したオートフィクションという形式と、メルテンスとムノの具体的な小説に見られるベルギー・アイデンティティの問題とがどのように関連しているのか分析することとしたい。

第二章 重層化するベルギー・アイデンティティ——ピエール・メルテンス『王の平和』をめぐる

ピエール・メルテンス『王の平和』は1995年に発表された長編小説である。1974年出版の『調停者 *Les Bons Offices*』をはじめ、彼は自伝的な作品を複数発表しているが、中でも本作は自伝的な要素とベルギーという集合的な歴史との間の接点を最も鮮やかに描き出した小説と言える。

作者と多くの共通点を持つ語り手で主人公のピエール・レイモンは、旅行代理店でガイドかつ年代記者として働く人物だが、ある時ガイドとして世界中を移動する仕事に名状しがたい苦しみを覚える。その後、自国ベルギーへの関心を強めていく語り手は、自らの少年時代、そして13歳の頃、自転車事故の際に遭遇したベルギー王レオポルド三世(1901-1983)の個人史、さらには「ベルギー史 *l'Histoire belge*」というベルギーにまつわる三つの過去を探究し、代理店の機関誌にルポルタージュを書くことを決意する。しかしながら、レイモンは次第に自らの試みへの自信を喪失していく。彼は、自身とレオポルド三世の個人的な「物語 *l'histoire*」も含めた完全な意味での「歴史 *l'Histoire*」を再構成することは不可能だと気づき、フィクションの創造へと方針を変更する。だが、語り手の周囲の人物は、フィクションという形式を信用しておらず、そのことに再びレイモンは失望する。結果的にルポルタージュは失敗し、結末部において、レイモンはこれまでにベルギーで起こった水害に思いを巡らせ、自身が幼少時代を過ごしたブリュッセルの一地区が水に沈められるという悲観的な想像をする。だが、同時に新たな世界において自らの試みに再び挑戦しようというかすかな望みも表明し、物語は幕を閉じる。

冒頭、レイモンは自らの誕生にまつわる出来事から語り始める。

C'est à peu près vers la même époque – en fait le jour même de ma naissance, le 9 octobre 1939, je n'y puis rien – que le Führer démocratiquement élu au sein d'une grande nation voisine signa un *mémoire* et une *directive* programmant l'invasion à court terme de notre petit pays.

隣の大国で民主的に選ばれた大統領が、我々の小さな国への短期的な侵攻を計画する「覚書」と「指令」に署名したのは、ほぼ同じ頃——私の力でどうにかなることではないのだけれど、実はまさに私の誕生日、1939年10月9日だったのである。¹⁴

1939年10月9日という日付は、作家ピエール・メルテンスの誕生日とも、ヒトラーがベルギー侵攻計画の指令を出した日とも一致しており、自伝的・歴史的な事実にも則った記述と言える。また、メルテンスは、ベルギー人権保護連盟に加入し視察員として中東やチリ、ギリシアなど多くの紛争地域に赴いた後、前述のように1976年に「ベルジチュード」の概念を提唱し、自国ベルギーへの関心を強めていく。彼の経歴は、旅行代理店で世界中を回った後、ベルギー史の探究を始めるレイモンの人生と相当程度重なっている。さらに、文章を書くことを生業としている点でも両者は共通しており、レイモンとメルテンスのたどる道筋がパラレルになっていることは間違いないと言える。

しかし、メルテンスは後にある講演の中で『王の平和』に関して、「これは私の完全なオートフィクションと言えるでしょう *Ce sera mon autofiction absolue*¹⁵」と述べている。確かに、レイモンとメルテンスの人生の軌跡が重複しているとはいえ、両者は同姓同名ではないため、前述のルジュヌヌの定義を踏まえても、この作品を自伝と呼ぶのは不適当だろう。そのうえ、冒頭からレイモンは次のように語る。

Une autobiographie tournant court puisque, pour la poursuivre, et raconter les prolongements de cette incrédulité des autres qui, d'entrée de jeu, m'entoura, il m'eût fallu, à défaut de réminiscences, un peu de cette imagination dont je me crois tout à fait dépourvu.

自伝は挫折してしまうものだ。だって、自伝を追究し、最初から私に向けられたあの他者の不信に満ちた視線が及ぼした結果を語るには、もし無意識的な記憶の蘇りがなかったら、自分には全くないと思っているあの想像力というものが少々必要になっていたであろうから。¹⁶

冒頭部で語られるこの回想は、小説全体の伏線になっている。なぜなら、先述の通り、レイモンが書くレオポルド三世と自身にまつわる物語、歴史が他者から信用されず、次第にフィクションへとシフトする一連の過程が、この小説で語られる主要なテーマの一つだからだ。自伝を完全な形で完成させることは不可能であり、結局は事実と想像を取り入れないと「自己」について書くことはできないという趣旨のこの記述は、のちに「ベルギー史」の再構成が不可能だと気づき、フィクションの創造へと傾いていくレイモン自身の行動の予告と言える。自伝からフィクションへと徐々に主人公の関心が移行していくことは、オートフィクションという形式に方向転換する意志の表明だと考えられよう。だが、すでに述べたように、このフィクションという形態すら主人公の周囲は信用しておらず、結果的に彼の試みは失敗に終わる。オートフィクションの執筆を試行する語り手の姿を、彼と多くの面を共有する作家メルテンスが描き出していくという二重の構造が小説の最初から提示されているのである。

しかしながら、『王の平和』がオートフィクションだとするならば、ここでいう「自己」（つまりオートフィクションの「オート」）とは誰なのかという疑問が生じる。確かに、作

者メルテンスと語り手＝主人公のレイモンには共通点が多いが、前述の通り同一人物と断定できないため、作中の「私」＝レイモン＝メルテンスとは言えない。そのうえ、レイモンは確かに自身の人生を語っているが、同時にベルギー王レオポルド三世の人生にも触れ続ける。重要なのは、レイモンがレオポルド三世について記す際に、一人称単数形の「私 « je »」を用いている箇所がある点だ。エスパース・ノール叢書版の245頁から247頁、そして248頁から251頁にかけて、レイモンはまず「王は思う *pense le Roi*¹⁷」という文に続けて、王の視点に立ち、一人称単数形で第二次世界大戦中のベルギーの歴史について語る。ナチス・ドイツにベルギーが降伏する場面に登場する「私は明日降伏します *Je vais capituler demain*¹⁸」という表現は、彼がレオポルド三世の心情を想像し、自らの感情として歴史的一幕に身を投じることを意味しているのだろう。レイモンがレオポルド三世に対してこれほど強い関心を抱くのは、王の人生が失墜のイメージを喚起することとも関係している。ナチスへの降伏をきっかけに国民からの信頼を失い、戦後復位をめぐる激しい論争が起こるも、結局退位するという王の人生は失墜のイメージと容易に結びつくが、これは前述のレイモンが王と初めて出会った際の自転車からの落下事故や、彼の「ベルギー史」探究の挫折など、作中で繰り返し登場するモチーフだ。落伍者というイメージにおいて重なり合うことにより、レオポルド三世の物語は、レイモンの中で自身の物語と一体化し、「自己＝オート」が曖昧化、二重化していくのである。

一人称の「私 « je »」が指す対象の不確かさは、逆にレイモンが自身を三人称単数形「彼 « il »」で呼ぶ場面の存在により一層強まっている。歴史的記述からフィクションへとシフトしようとするも、周囲のフィクションへの無関心や嫌悪を感じ取ったレイモンは、自らに対し「彼 « il »」という三人称単数形を用いながら寂しさを表明する。

Pierre Raymond avait beau ne pas penser qu'il en écrivait un, de roman, que c'était encore autre chose, de ni plus ni moins digne, il avait été surpris, attristé qu'on se méfiât à ce point du genre romanesque.

ピエール・レイモンが、どんなに自分の書いているものを一つの小説なのだと考えまいとしても、あるいはまだ他のものだけでもまさしく小説と呼ぶにふさわしい何かなのだと考えまいとしても、それは意味のないことだった。そして、これほどまでに小説というジャンルが警戒されていることに彼 [il] は驚き、また悲しみを感じていた。¹⁹

引用箇所における三人称単数形への切り替えは、西洋の伝統的な小説に現れる三人称の主人公の存在を思わせ、レイモンが小説の主人公に自らをなぞらえようとしていると考えられるかもしれない。いずれにせよ、ここでは、絶対的な一人称の「私 « je »」が喪失し、主客が曖昧化していく様子が描き出されていると言えるだろう。

「自己＝オート」の所在の問題に関してさらに注目すべきなのは、『王の平和』にレイモンと異なる人物としてピエール・メルテンスという名前の人物が登場することである。最

終章で、レイモンはベルギーで発生した水害に思いを馳せるが、その中で次のような記述が登場する。

À Dinant, les habitants encerclés par les eaux accrochaient aux corniches de leur demeure un chiffon de couleur vive pour signaler qu'ils voulaient être évacués. Des gens se noyaient dans leur cave. Je me souviens de ce vieillard de quatre-vingt-dix-neuf ans (j'ai même encore son nom en mémoire : il s'appelait Pierre Mertens) qu'on dut évacuer contre son gré d'un dortoir, dans un home à Hermeton, où il était resté seul, « comme absent », précisait un journaliste, se cramponnant à son châlit ; il ne comprit jamais ce qui lui arrivait ni pourquoi une barque l'emporta loin du lieu où, paisiblement, il s'abandonnait à une rêverie insulaire.

ディナンでは、水に囲まれた住民たちが、避難の意志を示す合図を送るため、家のコーニスに明るい色の布をかけていた。地下室へと姿を消す人もいた。私はあの99歳の老人を覚えている（名前だってまだ記憶している。ピエール・メルテンスという人だった）。エルムトンにある家の共同寝室から、本人の意志に反して救出せねばならなくなったあの老人のことを。ジャーナリストの示すところによれば、彼はその家の中に、ベッドの骨組みにしがみついて、「放心したみたい」一人きりでいた。何が自分に起こっているのか、なぜ一隻のボートが、安らかに孤島の夢に身を委ねているその場所から、自分を遠くへ運んでいったのか、彼には決して分からなかったのだ。²⁰

ここに登場するピエール・メルテンスなる人物は、年齢や住んでいる場所などを踏まえても、作家ピエール・メルテンスと同一視することはできないが、この名前の人物を作中に登場させているのは意識的だろう。この人物はこの場面にしか登場しないが、『王の平和』において、作家メルテンスの分身とも呼べる人物を複数見ることができる点は注目に値する。

このように、『王の平和』では、一人称の「私 « je »」が曖昧化し、レイモン以外にも作家メルテンスの「分身」が登場するなど、「自己＝オート」に様々なレベルで亀裂、あるいは重層化が生じているが、このことは本小説で明らかにされるベルギーという国家のイメージとも無関係ではない。次の一節を見てみよう。

À force de se déchirer, de se fragmenter, de se séparer de soi-même en recourant à des procédures d'une extrême sophistication, et en prétendant encore le faire en vertu d'un consentement mutuel qui marinait dans la haine réciproque, l'État, la Nation, le pays, quel que soit le nom qu'on donnait encore à tout cela s'était enfoncé dans une brume opaque et l'embrouillamini institutionnel.

極端な洗練というやり方に訴え、相互の憎み合いに浸された合意の結果、国家を生み出そうと主張したことで、あまりに引き裂かれ、ばらばらになり、名と実が乖離してし

まったために、「エタ État」、「ナシオン Nation」、「ペイ pays」は——どの名前で呼ぶにせよ——暗い霧の中に、制度的大混乱の中に沈んでしまっていた。²¹

この文章は、レオポルド三世の息子ボードゥアン一世 (1930-1993) の死に際し、王の葬儀やその後喪に服する人々の様子を目の当たりにしたレイモンの心境を表したものである。「相互の憎み合い haine réciproque」という表現は、おそらくワロニーとヴラーンデレン、あるいはフランス話者とオランダ話者の対立を示しているが、そうした分裂、分断の結果、もはやベルギーが国家 (引用中の「エタ」「ナシオン」「ペイ」はすべて国や国家を意味するフランス語である) という枠組みを保つことすら難しいという彼の認識を見ることができる²²。ボードゥアン一世の死をめぐる一連の出来事を通じてレイモンがこのような考えに至るのは、ベルギー人の多くが王の死を悲しみ、場合によっては取り乱す姿を目にし、王がベルギーの集合的意識の一つの支柱になっていたと理解したからだ²³。ボードゥアン一世は、連邦化への準備が進む 1988 年にスピーチの中で「連邦は統合であり分裂ではありません²⁴」と述べたことで知られ、連邦化は逆にベルギーという国家を存続させる一つの手段だと表明した人物であり、だからこそベルギー人にとっての精神的支柱のイメージとともに作中で登場しているのであろう。

ベルギーの「分断」「分裂」のイメージは、語り手が自身の試みを開始する前に、同僚と会話する場面にも表れている。この同僚は、これから赴任するベルリンの町について、以前東西冷戦時代に滞在していたレイモンに尋ねる。そこで、レイモンは次のように答える。

« Berlin, Jérusalem, Nicosie... expliquai-je, dans un sens, il n'y a que dans ces villes que je me sois senti à l'aise, jusqu'au tréfonds du malaise même. Du moins, la situation était claire. C'est pour ça que je me sentais là-bas chez moi. Comme ici... »

私は説明した。「ベルリン、イェルサレム、ニコシア……。ある意味ではこういう都市でだけ、不安そのものの奥底でさえも、安らぎを感じられたんです。少なくとも状況ははっきりしていました。だから、あそこでは地元にいるみたいに感じていたんです。ここにいるみたいに……。」²⁵

この直前には、「[...] 代理店では二つに分断された場所の——あるいは結局同じことだが、二重になった場所の——専門家だったのだと私は彼に言った Je lui dis que [...] j'avais été à l'agence le spécialiste des lieux coupés en deux – ou dédoublés, ce qui revenait au même.²⁶」とも記されている。ベルリン、イェルサレム、ニコシアといった冷戦や紛争により二つに分裂した都市において、「ここ」、すなわちベルギー (またはブリュッセル) と同様にくつろげたと回想するレイモンの発言は、彼がベルギーを分裂し、二重化した場所として捉えていることの証明と言えるだろう。このように、ベルギーやブリュッセルが分裂、二重化した場所として描かれていることは、先述の人称の分裂、あるいは二重化の問題と密接に

結びついている。なぜなら、レイモンの試みは、自身の物語＝レオポルド三世の物語＝ベルギー史を再構成することであり、それらがすべて「私 « je »」のアイデンティティの構成要素と捉えられているからだ。つまり、レイモン、レオポルド三世、ベルギー、そしてブリュッセルといったすべてが、分裂し、重層化した「自己＝オート」として語り手の中で統合されていると考えられるのである。

レイモンの「自己」認識がベルギー・アイデンティティの複雑さと一致することは、挫折に次ぐ挫折が起こるペシミスティックなこの小説において、最後にかすかな喜びの表明にもつながる。

Je pressens qu'on pourrait avoir envie de pleurer un peu, de bonheur, dans cette ambiance carnavalesque.

私はこのカーニヴァルのような雰囲気の中で、ひょっとしたらみんなが幸福のあまり少し泣きたいと思うかもしれないと予感している。²⁷

この一文は、自身の試みが失敗に終わり、ブリュッセルが水に沈むという悲観的なイメージが語られた後に、突如として表明されるレイモンの喜びの声である。カーニヴァルのような雰囲気 *ambiance carnavalesque* という表現からは、メルテンス＝レイモン＝レオポルド三世＝ベルギーといった「自己」の多様な構成要素が、分裂し重層化した存在として一致し、ベルギー・アイデンティティという一体感を得られた喜びの表出と考えられるだろう。

以上のように、ピエール・メルテンス『王の平和』は、ベルギーで自伝を書くことの困難を暴露したオートフィクションと捉えられる。本小説をオートフィクションと見なすことができるのは、作品全体を通じ、作者、語り手、主人公という三者のアイデンティティの所在を意図的に不明瞭にし、伝統的な自伝の枠組みを乗り越えようとする姿勢が貫かれているからだ。「自己＝オート」の曖昧化、アイデンティティの重層化は、語り手個人の「私 « je »」のレベルに留まらず、ベルギーという国家、あるいはブリュッセルという都市における分裂や重層化のイメージにも統合されている。こうしたベルギー・アイデンティティの分裂と二重化のイメージは、前章で検討した彼自身の「ベルジチュード」概念とも関連するだろう。「ベルジチュードに別れを告げるために」と宣言した後も、メルテンスは自身の考え方を完全に撤回することはしなかった。だからこそ、本書『王の平和』の中で再びベルギー・アイデンティティの問題を取り上げ、それを詳細に描き出しているのだろう。小説が、単にペシミスティックな終わり方をするのではなく、最後にかすかな希望を表明する点もメルテンス独自のベルギー・アイデンティティを提示できた喜びを示しているのかもしれない。本章で検討したベルギー・アイデンティティの諸相は、次章で考察するジャン・ムノ『ブラバントの英雄の忌むべき物語』にも共通した要素が多く見られるため、注意する必要があるだろう。

第三章 「夢で見たような自伝」——ジャン・ムノ『ブラバントの英雄の忌むべき物語』をめぐって

1982年に発表された『ブラバントの英雄の忌むべき物語』は、『ヒッパリオン *L'Hipparion*』(1962)や短編集『奇妙な物語 *Histoires singulières*』(1979)など、幻想的な小説を多く発表してきたジャン・ムノの作品の中で最も自伝的な要素の強い作品である²⁸。ブリュッセル出身の主人公「パパン Papin」(これはあだ名である)の人生が、誕生から1981年頃まで描かれるこの作品では、厳格な教師である両親の影響を受けて育った少年時代から、ナチス・ドイツのベルギーへの侵攻に伴う国外避難(Exode)の体験、そして両親が所属していた文学サークルに参加していたこと、戦後に両親と同じ学校の教師として就任するも早期退職を決意することなど、作者自身が実際に経験した出来事が、時折皮肉も交えながらユーモラスに描かれている。

このように、『王の平和』と同様、『ブラバントの英雄の忌むべき物語』も、作者と語り手=主人公に共通点が多い作品と言えるが、この作品を自伝と断定することはできない。冒頭部には次のような記述がある。

Je dois me méfier de mon imagination. L'autobiographie est un genre exigeant. Il exclut la fabulation, la conjecture, la présomption flatteuse [...]. Du vrai, rien que du vrai vécu ! Or, quand je me relis, le doute m'assaille.

自分の想像力を警戒しなくては。自伝は要求の多いジャンルだ。作り話も憶測も、実際より良く見せようという思い上がりも排除する。[...]いくらかの真実、生きられた真実だけだ！自分の書いたものを読み直すと、私は疑念に囚われてしまう。²⁹

つまり、自伝は語り手にとって非常に手強いジャンルであり、それを完成させることは困難だという認識が最初から示されているのである。自伝を書こうというパパンの意志は逆説的で、むしろその不可能性を強調しオートフィクションを紡ぎ出す最終的な決意の伏線と捉えるべきだろう。というのも、この小説では、ルジュンヌの定義する「自伝契約」が意図的に無視されているからだ。

そのことは、まず作中における固有名詞の不安定さから読み取ることができる。パパンという主人公の呼び名はあだ名であり、最後まで本名は登場しないため、作家ジャン・ムノと同一人物と言い切ることは難しい。そのうえ、パパンは物語の途中で何度も似ているが異なる名前にすり替わる。エスパース・ノール叢書版のあとがきを書いている文学研究者のジャン＝マリー・クリンケンベルクもこの点に触れているが、例えば34頁には「パプレ Papelet」や「パプロン Paperon」、173頁には「パピンチャ Papintje」という名前が登場する。最後の「パピンチャ」については、語り手が両親と三人で母の出身地に行き、彼女のいとこたちとオランダ語で会話する次の場面に見られる。

ブリュッセル人作家のオートフィクションに見るベルギー・アイデンティティ
——ピエール・メルテンス『王の平和』とジャン・ムノ『ブラバントの英雄の忌むべき物語』をめぐって

Mijn man, Kloozius... En onze kadee, Papintje... Nog een pintje?... Prosit! Smakelijk!

私の夫、クロージウスと……そして私たちの子供のパピンチャ [Papintje]……もう一杯
ビール [pintje] は？……乾杯！ああ美味しい！³⁰

ここでは、小さくてかわいいものを示すオランダ語の接尾辞 -tje をパパンにつけて主人
公への親しみを与えると同時に、オランダ語でビールを意味する「ピンチャ pintje」と韻
を踏ませるために、パパンの語尾を変えているのであろう³¹。

語り手の人称についても特徴的だ。この作品ではパパンによる一人称「私 « je »」の
語り手が大部分を占めているが、結末部の第四章には、三人称「彼 « il »」でパパンのこ
とを語る場面が存在する。ある日、パパンは自分で自分宛に手紙を書き、その手紙にムノ
[Muno] という名前を用いて返事を出すという遊戯を始める。これは、パパンという一人
称の「私 « je »」がパパンとムノという二つに分裂、二重化する状況を示している。だが、
実は事態はさらに複雑だ。

Papin avait toujours quelque chose à apprendre à Muno, et celui-ci, une bonne raison de n'être
pas d'accord avec Papin : il leur semblait que la matière de leur dialogue était inépuisable. Bien
peu comprendront cela, je pense.

パパンはいつも何かムノに知らせるべきことがあったし、ムノはパパンに賛同できない
何かしら正当な理由があった。彼らは自分たちの対話のテーマが無尽蔵にあると思っ
ていた。こうしたことを、ほとんどの人は理解できないだろうと私 [je] は思う。³²

つまり、この一節には手紙のやり取りを行う分裂し、二重化したパパン＝ムノを背後か
ら眺める第三者の「私 « je »」が登場しているのである。「私」、パパン、ムノという三者
が、同一人物とも全くの別人とも明示できない状態で入り組み、アイデンティティが重層
化している状況がここから読み取れるであろう。結末部における語り手のアイデンティ
ティの複雑さは、冒頭で語り手が意図していた自伝における主体とは一線を画している
が、そのことは次の描写からも分かる。

Un jour, Muno écrivit plus longuement, des pages et des pages, une véritable histoire, étrange et
familière que Papin lut comme une autobiographie rêvée, paysage archiconnu transfiguré par le
déclin du soleil et le déploiement des grandes ombres narquoises et pathétiques.

ある日、ムノは普段よりも長く、何ページも何ページも、奇妙ながら慣れ親しんだ、真
の物語を書いた。パパンはそれを夢で見たような自伝として、夕暮れと、嘲笑的でどこ
か哀愁漂う大きな影の広がりによって変容した、よく知っている風景として読んだ。³³

ムノがパパン宛てに書いた手紙は、「夢で見たような自伝 autobiographie rêvée」であり、

それは当初語り手が意図していた伝統的な自伝の枠を超えたものと言える。結局この「夢で見たような自伝」こそ、それまで語られてきたパパンの物語だということが露わになるのである。『ブラバントの英雄の忌むべき物語』は、このようにルジュヌヌの定義する意味での自伝を意識的にずらしたフィクションになっており、作者、語り手、主人公の三者のアイデンティティの所在が意図的に曖昧化されている点で、オートフィクションとみなすことができるであろう。

『ブラバントの英雄の忌むべき物語』に見られる、語り手のアイデンティティのイメージは、『王の平和』と同様、ベルギーやベルギー人のアイデンティティの問題と重ね合わせられている。

Nous étions des intellectuels, nous n'étions pas Flamands. Ni Wallons. [...] En dépit des apparences, nous n'étions pas non plus Bruxellois. Le Bruxellois, ou ça parlait mal, ou c'était libéral, souvent les deux. Or nous parlions correctement et n'étions pas libéraux.

私たちは知識人であって、フラマン人でもワロン人でもなかった。[...] 見かけに反して、ブリュッセル人でもなかった。ブリュッセル人というのは、言葉を下手に話すか、リベラル、あるいはしばしばその両方だった。ところが、私たちは正しい言語を話していたし、リベラルでもなかった。³⁴

また、直後には次のような記述もある。

Heureusement, nous étions Belges. [...] Hélas, des propos des Clauzius se dégageait aussitôt cette autre évidence : être Belge n'avait guère de sens. Petit pays, petites gens. Rien que des boutiquiers amateurs de football et de sport cycliste. Une nationalité médiocre, une négation supplémentaire, certainement pas une patrie.

幸運にも私たちはベルギー人だった。[...] でも残念ながら、クロージウス[パパンの両親のこと]の言葉から、すぐにあのもう一つの明らかな事実が引き出されるのだった。すなわち、ベルギー人であることはほとんど何も意味しないということが。小さな国、地味な人々、サッカーや自転車競技の愛好家の小売商くらいしかいない。凡庸な国民性に、必要以上の否定。確実に祖国などと言えるものではなかった。³⁵

引用中に見られる「必要以上の否定 *négation supplémentaire*」という表現は、マルク・カグブールがベルギー・フランス語文学におけるアイデンティティの他律性を表現する言葉として用いた「穴の空いたアイデンティティ *identité en creux*³⁶」を髣髴させるが、いずれにせよ主人公はベルギー人であるという事実が積極的な意味を持ちえないと直感している。

ベルギー・アイデンティティの脆弱さは、パパンの父親に代表されるように、それを進んで捨て、自らをフランス人と同化させようとする姿勢を導く。主人公の父は、パリで話

ブリュッセル人作家のオートフィクションに見るベルギー・アイデンティティ
 —ピエール・メルテンス『王の平和』とジャン・ムノ『ブラバントの英雄の忌むべき物語』をめぐって

される「正しい」フランス語を絶対視しており、ベルギーで話される言語を以下のように蔑視している。

D'une part les expressions vicieuses, belgicisms, wallonismes, flandricismes, germanismes, provincialismes, brabançonismes, anderlechtismes, molenbeekismes, woluwismes, wemmelismes, louvainismes, jettismes, saint-josse-ten-noodismes, ninovismes, qui menacent continûment notre belle langue, la pervertissent de l'intérieur, tentent de l'occuper, nous contraignent à une vigilance de tous les instants, à une autocritique incessante, à un contrôle permanent de nos moindres propos si nous voulons être et demeurer des Francophones intellectuels, c'est-à-dire, par excellence, des Résistants, d'autre part...

一方に間違った表現、すなわちベルギー語法、ワロニー語法、フランドル語法、ドイツ語的語法、地方訛り、ブラバント語法、アンデルレヒト語法、モーレンバーク語法、ウォリュウエ語法、ウェメル語法、ルーヴァン語法、ジェ語法、サン＝ジョス＝タン＝ノード語法、ニノーヴ語法といったものがある。これらは、絶えず我々の美しい言語を脅かし、内側から歪め、支配しようとするものだ。フランス語を話す知識人、つまり際立って「抵抗者」でありたいのならば、我々は常に用心し、ひっきりなしに自己批評をし、どんな些細な発言をも監視し続けることが求められる……。³⁷

このように、パパンの父は、具体的なブリュッセルの地区やベルギーの都市の名を挙げながら、ベルギーで話される言語を、「我々の美しい言語を脅かす存在として軽蔑している。彼の態度からは、ベルギー人というアイデンティティを自発的に捨て去り、むしろ自身を「正しい」言葉を話すパリジャンと見なしたい願望が透けて見えるだろう。主人公の父はまたヴラーンデレンの言語も蔑視している。

Après tout, n'est-ce pas, ils n'avaient qu'à s'en prendre à eux-mêmes, ces Flamands ! Pourquoi ne parlaient-ils pas le français ?

結局、彼らは自分たち自身を批判すべきじゃないか、あのフラマン人たちは！ 何でフランス語を話さないんだ？³⁸

ベルギーで話されるフランス語やヴラーンデレン語よりもパリのフランス語の方が優位だというこの考え方は、パパンの父のみならず彼の文学サークルの友人たちにも共有されている認識だが、こうした知識人たちの姿勢も、ベルギー人が肯定的かつ積極的なアイデンティティを持つ際の大きな障害になっているのだろう。ただし、主人公は作品全体を通して常に父親の態度に懐疑的であり、最終的に彼が手紙の中に表現する自己の「分裂」と「二重化」のイメージは、父への抵抗、つまりフランス中心主義的な態度を乗り越える手段としても機能していると考えられる。

ベルギー・アイデンティティの脆弱さや否定的な側面は、『王の平和』の分析で確認したのと同様に『ブラバントの英雄の忌むべき物語』においても、言語状況の複雑さ、そしてそこから生じる分断と重層化のイメージと結びついている。パパンは、物語の半ばでブリュッセルから郊外のマレーズという土地に移住する。新しい家での隣家との境界に関する次の描写を見てみよう。

Une haie pas quelconque pourtant : elle séparait non seulement nos jardins mais aussi nos communes respectives. La sienne était wallonne et la mienne, flamande. Il parlait flamand sur sa parcelle wallonne, et moi, français sur ma *perceel* flamande.

もっとも垣根は取るに足りないものではなかった。それは単に私たちの庭を隔てるだけでなく、それぞれの自治体を分けるものだったのだ。彼[隣人]の属する自治体はワロニーであり、私の方はフランドルだった。彼は自分のワロニーの区画[parcelle]上でフラマン語を話し、私は自分のフランドルの区画[perceel]上でフランス語を話していた。³⁹

このように、ブリュッセル周辺域におけるフランス語圏とオランダ語圏は入り組み、住民が話す言語と自治体の区分が正確には一致しない状況になっていることが分かる。「区画」という言葉に、フランス語の「パルセル parcelle」とオランダ語の「ペルセール perceel」の二種類が用いられているのも、言語状況の複雑さを強調するためだろう。引用部分に登場する隣人は、後にヴラーンデレン民族運動に傾倒し、語り手との間に精神的にも溝が生じるが、そのこともブリュッセル周辺域の分断と重層化のイメージを一層強めていると言える。

結末部で、ムノとパパンが手紙のやり取りを始める直前、パパンは近所を散歩している際、フランス語圏とオランダ語圏の境界域を歩きながら、次のように思う。

En somme, me suis-je dit, il est tantôt wallon, sur le versant paternel de l'anarcho-syndicaliste, tantôt flamand, *mijn hart*, sur le versant de *moeder* Liza quand je rentre chez moi à l'heure des nostalgies. Coupé en deux dès le matin ! Pas étonnant que mon village s'appelle *Malaise*, et que, dans ces conditions, je ne puisse éviter les contradictions et les ambiguïtés. Tantôt mes deux moitiés se disputent, tantôt l'une prend le pas sur l'autre. Il arrive aussi qu'elles se fassent des concessions. Ah ! le compromis ! C'est alors que je me sens le plus Belge et, paradoxalement, le plus inauthentique, le marginal.

私は思った。結局、私の心は、時にはワロン、つまり無政府主義者の父方の系譜へ、またある時には、私の心は、^{マイン ハート} フラマンの、^{ムッダー} リザ母さん[母方の祖母]の系譜へと傾く。ノスタルジーに駆られるような時間に、家に帰ったりすると。はじめから二つに切られていたんだ！ 私の村がマレーズという名前なのも驚くべきことじゃないし、こんな条

件の下で、私が矛盾や曖昧さを避けられないのも驚くべきことじゃない。時々私の二つの半分同士が言い争いをすることも、片方がもう半分に完全に勝ることだってある。譲歩することだってある。ああ！ 妥協！ こういう時に、私は自分が一番ベルギー人なんだと思い、逆説的だけれど、一番不確かで枠外にいるように感じるんだ。⁴⁰

この描写が、分裂と重層化のテーマと連動しているのは明らかだろう。家族の系譜という個人のレベルで「二つに切られている Coupé en deux」感覚は、パパンの心の中でヴランデレンとワロニーというベルギー特有の言語的・政治的分断と結びつけられている。分裂し重層化した存在、「不確か」で「枠外にいる」存在として、自身とベルギーのアイデンティティが重なっていたのだと、語り手はここでようやく気づくのである。彼が住んでいる村の名前「マレーズ Malaise」は、フランス語で不調や不安などを意味する単語であり、この一節の中で提示される語り手とベルギーのアイデンティティのイメージと合致しているだろう。この場面の直後にパパンが自分宛に手紙を書き始めることを踏まえると、散歩中に気付く自分自身やベルギー・アイデンティティの分裂、重層化という状況が、オートフィクションの執筆への一つの契機になったことは間違いない。

以上のように、ジャン・ムノ『ブラバントの英雄の忌むべき物語』は、ルジュンヌが定義する意味での自伝とは一線を画したオートフィクションと考えられる。それは、主人公の固有名詞が頻繁に変わる点、主人公の人格が分裂し、アイデンティティが複雑化する点など、伝統的な自伝に見られるアイデンティティ表明のあり方が意識的に崩されているからだ。分裂し重層化した主人公個人のアイデンティティは、最終的にベルギーやブリュッセルという集合的アイデンティティの問題と結びつく。複雑な地理的・言語的状況が詳細に描かれることで、ベルギー人あるいはブリュッセル人も分裂し重層化した存在として提示され、主人公のアイデンティティのイメージと重ね合わせられている。

たとえ積極的なベルギー・アイデンティティを見出すのが困難であってもそれを表現しようとするムノの姿勢は、メルテンスが標榜した「ベルジチュード」とも親和性がある。ムノが「ベルジチュード」への関心を示した点はすでに指摘したが、彼もまたベルギーの独自性を言語化することの重要性を、この小説を通じて強調しているのだろう。特に、主人公による分裂し重層化したベルギー・アイデンティティの宣言が、パリのフランス語を極端に重視する父への抵抗としても機能している点は、ムノ独自の「ベルジチュード」の探究として注目に値する。このように、前章で検討したピエール・メルテンス『王の平和』と同様、『ブラバントの英雄の忌むべき物語』においても、ベルギー・アイデンティティの複雑さという問題が、オートフィクションという独特な形式の中で主題化されているのである。

おわりに

本稿では、ピエール・メルテンス『王の平和』とジャン・ムノ『ブラバントの英雄の忌むべき物語』というブリュッセル出身の二名の作家のオートフィクションの分析を行ってきた。両作品ともに、主人公の名前や人称の分裂、重層化を通じて、ベルギー・アイデンティティやブリュッセルの特性が描き出されている。分裂と重層化のイメージは、ベルギー国家やブリュッセル周辺域のイメージとも重なっており、だからこそ作者＝主人公＝語り手というアイデンティティを明言する形式である自伝をベルギーで書くことの不可能性が、両小説において強調されているのであろう。

しかし、たとえベルギー人、ブリュッセル人が自身のアイデンティティの所在を明示することが困難であり、「自己＝オート」を曖昧にしか表現しえないとしても、その事実をベルギー人の特性として認めることで、伝統的な自伝とは異なる形で「自己＝オート」の物語を紡ぎ出していこうという意志が、両作家において貫かれていると言えるのではないか。先述のメルテンスによる「ベルジチュード」概念は、こうした態度と軸を一にするものだと考えられよう。ムノの作品の中に現れる「自己」探究の姿勢も、「ベルジチュード」の考え方と間違いなく共鳴している。

冒頭で紹介したエスパース・ノール叢書の資料には、次のような記述がある。

La prise en charge de la dimension fantasmatique de l'identité par l'autofiction décrit ainsi très bien la tension qui se joue entre les désirs du « moi » [...] et les altérations apportées par l'Histoire et la collectivité [...].

オートフィクションによるアイデンティティの幻想的次元の扱いは、このように「私」の欲求[...]と、「歴史」と集合性によりもたらされた変化[...]との間で揺れ動く緊張を非常によく描き出している[...]。⁴¹

つまり、オートフィクションという形式は、「私「je」」というアイデンティティ獲得の欲求と集合性との間で揺れる緊張を描くのに重要な役割を演じており、両者が一体化してアイデンティティの「幻想的次元 dimension fantasmatique」を生むことが可能になるのである。本稿で取り上げた二作品においても、ベルギーという集合的アイデンティティと主人公個人のアイデンティティとが混ざり合い、その「幻想的次元」が表現されていると考えることができるだろう。特に『王の平和』の結末部に見られる、主人公やレオポルド三世、ベルギーといった「自己＝オート」の構成要素が分裂、重層化した存在として一体化する場面は、「不可能な存在」として統合されたベルギー・アイデンティティの「幻想的次元」の顕現を予感させるものである。このように、ピエール・メルテンス『王の平和』とジャン・ムノ『ブラバントの英雄の忌むべき物語』は、オートフィクションというジャンルの採用を通じてベルギー・アイデンティティの特性をあぶり出すのに成功してい

ブリュッセル人作家のオートフィクションに見るベルギー・アイデンティティ
——ピエール・メルテンス『王の平和』とジャン・ムノ『ブラバントの英雄の忌むべき物語』をめぐって

ると同時に、オートフィクションがベルギー人作家のアイデンティティ探究に関わる物語を実現するうえで有効な形式だということを証明した作品になっていると言えるだろう。

注

1. Philippe Lejeune, *Le Pacte autobiographique*, Paris, Éditions du Seuil, 1996, p. 14.
2. フィリップ・ルジュンヌ『フランスの自伝—自伝文学の主題と構造』小倉孝誠訳、法政大学出版局、1995年、12頁。
3. Philippe Lejeune, *op.cit.*, p. 26.
4. Serge Doubrovsky, *Fils*, Paris, Éditions Galilée, 1977, couverture.
5. Stanislas Pays (dir.), *L'Autofiction – dossier pédagogique*, Bruxelles, Communauté française de Belgique, coll. « Espace Nord », 2017, p. 6.
6. ドゥーブロフスキーは、アイデンティティの表明に関し、オートフィクションにおいても自伝と同様「作者」「語り手」「主人公」の三者は明確に一致していると主張した。しかし、先述のペイによる資料では、この三者のアイデンティティの不一致がオートフィクションを定義するうえで重要な要素になっていると説明している。このように、オートフィクションという形式に関する合意は得られていないが、本稿ではアイデンティティの表明の問題については、ペイの考え方を参考にすることとしたい。
7. Pierre Mertens, « De la difficulté d'être belge », in *Les Nouvelles littéraires*, n. 2557, 1976, p. 14.
8. Claude Javeau, « Y a-t-il une belgitude ? », in *Les Nouvelles littéraires*, n. 2557, 1976, p. 15.
9. Jean-Pierre Orban, *Pierre Mertens – Le siècle pour mémoire*, Bruxelles, Les Impressions Nouvelles, 2018, pp. 216-217.
10. *Ibid.*, p. 218.
11. *Idem.*
12. Pierre Mertens, « Pour en finir avec la belgitude », in Hugues Dumont, Christian Franck, Jean-Louis De Brouwer *et al.*, *Belgitude et crise de l'État belge*, Presses de l'Université Saint-Louis, 1989, pp. 239-248.
この講演では、メルテンスが「ベルジチュード」の概念を提唱した経緯やそれに対する多くの反論を説明したうえで、ベルギーという国はもはや「完全に神話的な領域 d'ordre parfaitement mythologique」でしか存在しえないのではないかというやや悲観的な見解が述べられている。「ベルジチュードに別れを告げるために」というタイトルは、積極的に「ベルジチュード」の概念を撤回するという意味ではなく、自身の考え方がベルギーの文学者や知識人に全面的には受け入れられなかった事実を冷静に受け止めようとするメルテンスの態度を示しているのであろう。
13. コンラッド・デトレーズ『燃やすべき草 *L'Herbe à brûler*』(1978)も「自己」の探究の問いにベルギー・アイデンティティの問題を結合させた傑作である。この作品は、ベルギーで生まれ育ち、後にブラジルなど外国で革命活動を行った後、最後に故郷に戻る男の物語だが、作家自身の経歴と重なるこの主人公にとって、子供時代を過ごしたワロン地方の村は、最終的に故郷への回帰という形で自己のアイデンティティの根源を思い出させる場として機能している。しかし、ベルギー・フランス語文学の中でベルギーという国家のアイデンティティと「自己」のアイデンティティの探究を明確に関連付けた作品の数は多くない。
14. Pierre Mertens, *Une paix royale*, Loverval, Labor, coll. « Espace Nord », 2006, p. 25.
15. Pierre Mertens, « Vérité de la fiction », in Ginette Michaux (dir.), *Histoire et fiction*, Carnières-Morlanwelz, Lansman éditeur, coll. « Chair de Poétique », 2001, p. 51.
16. Pierre Mertens, *Une paix royale*, *op.cit.*, p. 23.
17. *Ibid.*, p. 245.
18. *Ibid.*, p. 250.
19. *Ibid.*, p. 332.
20. *Ibid.*, p. 542.
21. *Ibid.*, p. 489.

ブリュッセル人作家のオートフィクションに見るベルギー・アイデンティティ
——ピエール・メルテンス『王の平和』とジャン・ムノ『ブラバントの英雄の忌むべき物語』をめぐって

22. 英語で「フランダース Flanders」、フランス語で「フランドル Flandre」と呼ばれるベルギー北部のオランダ語圏に関して、本稿ではフランス語の原文を訳す場合は「フランドル」（言語や人については「フラマン語あるいはフラマン人 flamand」）の語を用い、その他の場合は、現地語の発音に近い「ヴラーンデレン Vlaanderen」の語を用いることとしたい。
23. ボードゥアン一世の死後に取り乱す人々の様子については、以下の一節から読み取ることができる。

Des secouristes en uniforme et dotés de brassards marqués d'une croix rouge ceinturaient la place des Palais comme au lendemain d'un bombardement. C'est que, ivres de fatigue ou saturés par l'émotion, des vieillards, des femmes, de jeunes enfants pivotaient soudain sur eux-mêmes, pris de vertige, et tombaient en syncope.

赤十字のマークの付いたユニフォームと腕章を身にまとった救急隊員が、まるで爆撃の翌日かのよ
うに、王宮前の広場を囲んでいた。それは、疲労で正気を失ったか、あるいはあまりに興奮したのか、
老人、女性、若者や子供たちが、眩暈に襲われ、突然その場で一回転し、失神して倒れていたからだ。
(Pierre Mertens, *Une paix royale*, op.cit., p. 481.)

この描写は多少誇張されているとしても、ボードゥアン一世の死が、ベルギー人に与えた影響の強さを物語っていると言えるだろう。

24. 松尾秀哉『物語 ベルギーの歴史』、中央公論新社、2014年、174頁。
25. Pierre Mertens, *Une paix royale*, op.cit., p. 72.
26. *Idem*.
27. *Ibid.*, p. 554.
28. ただし、ムノは、『ブラバントの英雄の忌むべき物語』がジャック・アントワース社から出版された際のインタビューの中で次のように述べている。

[...] depuis que j'écris, depuis *Le Baptême de la ligne* qui est mon premier roman, j'ai toujours été hanté par l'autobiographie, et finalement, tout ce que j'ai écrit, ce sont des autobiographies plus ou moins indirectes, et en même temps, paradoxalement, je n'ai aucune sympathie pour le genre. Je déteste l'autobiographie et j'y suis amené ; je ne peux pas faire autrement.

[...] 書くことを始めてから、つまり最初の小説である『ラインの洗礼 *Le Baptême de la ligne*』を執筆してから、私は常に自伝というものに取りつかれてきましたし、結局私が書いたものは、すべて多かれ少なかれ間接的な自伝だと言えるでしょう。しかし同時に、逆説的ですが、私はこのジャンルが全く好きではないんです。自伝を嫌いながら、でもそちらへと導かれている。私には別のやり方ができないんです。(Isabelle Moreels, *Jean Muno – La subversion souriante de l'ironie*, Bruxelles, P.I.E. Peter Lang, coll. « Documents pour l'Histoire des Francophonies », 2015, p. 189.)

このように、『ブラバントの英雄の忌むべき物語』が彼の作品の中で最も自伝的な側面が強く表れている小説だとしても、それは多かれ少なかれ他の作品にも共通した要素だと言えるだろう。そして、後述するように、本小説に顕著な、伝統的な自伝のあり方を意図的に崩そうとする姿勢には、ムノの個人的な嗜好が影響している点も留意すべきだろう。

29. Jean Muno, *Histoire exécutable d'un héros brabançon*, Bruxelles, Communauté française de Belgique, coll. « Espace Nord », 2015, p. 22.
30. *Ibid.*, p. 173.

〈論文〉

31. 本作品は基本的にはフランス語小説であり、オランダ語の文章はごく一部に見られるに過ぎない。しかし、ヴァーランドレンに出自を持つパパンの母親に関連するモチーフや、彼がブリュッセルの郊外に引っ越した後のヴァーランドレン人の隣人に関わる描写には、オランダ語の単語が用いられている箇所が存在する。

32. Jean Muno, *Histoire exécration d'un héros brabançon*, *op.cit.*, p. 340.

33. *Ibid.*, p. 341.

34. *Ibid.*, p. 65.

35. *Ibid.*, p. 67.

36. ベルギーの文学研究者マルク・カグブールはベルギー・フランス語文学の歴史に関して次のように述べている。

Car la différenciation qui fait l'indépendance est restée chez nous au stade du « je ne suis pas ceci » plutôt qu'au geste posant « je suis ceci ».

というのも、他の文学からの自立を認める差異化は、我々のもとでは、「私はここにいる」と示す身ぶりよりも、むしろ「私はそれではない」としか言えない段階にとどまっているのである。(Marc Quaghebeur, *Balises pour l'histoire des lettres belges de langue française*, Bruxelles, Labor, coll. « Espace Nord », 1998, p. 26.)

このように、カグブールは、ベルギー・フランス語文学のアイデンティティについて、積極的ではなく、他の文学とは異なるという消極的な認識によってしか規定されえないものと考え、それを「穴の空いたアイデンティティ identité en creux」という言葉で表現した。

37. Jean Muno, *Histoire exécration d'un héros brabançon*, *op.cit.*, p. 186.

38. *Ibid.*, p. 58.

39. *Ibid.*, pp. 243-244.

40. *Ibid.*, p. 335.

41. Stanislas Pays (dir.), *op.cit.*, p. 32.

L'identité belge dans les autofictions d'écrivains bruxellois

– autour d'*Une paix royale* de Pierre Mertens

et *Histoire exécrationnelle d'un héros brabançon* de Jean Muno

Eiji Yamauchi

Le genre autobiographique et ses recherches se développèrent dans la seconde moitié du XX^e siècle en France. Selon Philippe Lejeune, il faut pour une autobiographie une déclaration de son auteur : celui-ci, le narrateur, et le personnage principal sont des personnes identiques. En approfondissant ce sujet, Serge Doubrovsky inventa le mot « autofiction », désignant une fiction strictement fondée sur la réalité. Cependant, la définition du terme reste à déterminer.

En Belgique aussi, le genre autofictionnel fleurit à la même époque. Dans *Une paix royale*, Pierre Mertens tenta de reconstituer son passé en croisant sa vie avec celle du roi belge Léopold III. Là, l'auteur mit en relief l'impossibilité de créer une autobiographie et rendit continûment l'identité du protagoniste ambiguë. L'image du déchirement et du dédoublement de son identité se superpose à celle de la Belgique divisée en trois communautés linguistiques malgré leur coexistence.

Jean Muno écrivit également un roman autofictionnel intitulé *Histoire exécrationnelle d'un héros brabançon*. Le protagoniste exprime ici aussi la difficulté de réaliser une autobiographie et insiste sur le dédoublement et le déchirement de son identité associée à l'image de son pays natal.

Ainsi, l'image du déchirement et du dédoublement de l'identité belge est soulignée dans ces deux autofictions. L'impossibilité de déclarer une identité avérée y est liée à celle d'écrire une autobiographie en Belgique car il est difficile pour les Belges de revendiquer une identité établie, qui, selon Lejeune, constitue un élément essentiel de l'autobiographie. Par conséquent, l'autofiction, genre révélant la « dimension fantasmagorique » de l'identité, répond bien à la demande des écrivains belges voulant fictionnaliser leur quête identitaire.